

2014年タコ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量						価 格				輸 入 国							
	漁獲	産地	輸入	東京	消費支出 生(%)	在庫	産地	輸入	東京	消費支出 生(円)	モロ ッコ	モーリ タニア	セネ ガル	タ イ	スペ イン	ベト ナム	中 国	メキ シコ
25	33.7	4.3	58.4	11.4	789	13.9	513	601	706	1,397	19.8	23.8	0.9	0.9	0.7	3.9	7.0	0.4
26	34.9	4.1	39.9	7.9	681	10.5	537	814	929	1,338	13.2	12.0	0.5	1.1	0.0	3.3	8.6	0.1
%	104	97	68	69	86	75	105	135	132	96	67	51	49	116	6	85	124	24

輸 入 の 動 向

26年の輸入量は4万トンで前年（5.8万トン）をかなり下回った。これは主力の西アフリカ物（モロッコ、モーリタニア）の減少を反映したものである。

本年の西アフリカでの漁

モロッコでの冬ダコの漁期は前年の11/1～3/31までで、その漁獲枠が21,500トンで前年（42,525トン）の半分となった。その配分は、船凍13,545トン（前年：26,791トン）、氷蔵船2,365トン（前年：4,677トン）、ダクラ陸凍壺5,590トン（前年：11,057トン）であった。冬ダコ漁は漁獲枠の減少の中でのスタートとなった。前年とは違って漁は低調で、例年並みの漁となった。船凍は北部漁場、南部漁場とも低調で昨年の半分程度の25トン程度で、サイズアソートも当初の大型主体から一時休漁を挟んだ明けには、6番主体に7,5,8番の小型（日本向け）に切り替わった。ツボは当初100トン程度の持ち帰りであったが、枠の増枠もなく1月で満枠となった。サイズは、臨時休漁明けには7番主体に、6番8番5番混じりであった。

夏ダコ漁は、前年より4日早い6月1日の解禁で8月31日までの期間であった。漁獲枠は9,400トン（前年：10,000トン、2年前：5,500トン、3年前：7,000トン、4年前：10,000トン）で内船凍5,922トン（前年：6,300トン、氷蔵船1,034トン（前年：1,100トン）、ダクラ陸凍壺2,444トン（前年：2,600トン）であった。漁は、壺漁が当初から枠の消化が進み安定した漁が続いた。サイズは昨年同様2,3,4番の大型が大半であった。トロールは、1日0.5トンで、良い漁ではなかったが、サイズは小型少なく3番主体に4.5番で70%を占めていた。

モーリタニアの冬ダコ漁は、前年の11月15日に壺が解禁（漁期：5月15日まで）となったが、漁自体は昨年を下回る低調な漁であった。サイズアソートは当初は、5,6番主体に4番,7番,3番混じりであった。

船凍や氷蔵船のトロール漁も前年の12月1日から4月末まで漁が続いた。漁況は1日1トン进行を割りこんでおり低調で、1隻10-20トン程度であった。サイズアソートは3番から8番まで寸胴型であった。

夏タコ漁は壺漁が前年より10日遅い6月26日解禁8月20日まで。トロール船凍と氷蔵船は5,6月の2ヶ月の休漁で、7月11日解禁で8月20日までで、何れ漁期は前年より短縮された。

壺漁が前年（100トン程度）に比べると少し落ち気味の漁獲をみた。アソートは当初5番中心に4,6番混じり、トロールは1日1トン以下でやや低調で、サイズは5,6番主体に7番混じりであった。

今年はモロッコ、モーリタニアとも冬タコ、夏ダコ漁が低調であった。こうした現地での漁模様のうへ、浜値の高騰、為替円安も重なり国内搬入は前年をかなり下回り、価格の上昇が顕著であった。したがって、国内在庫の減少も顕著となり、その結果、輸入価格、消費地

価格とも前年を上回った。

輸入国は、本年はモロッコが33%（前年：34%）とモーリタニアの30%（前年：41%）を抜いて最も多かった。またサハラ沖の不漁で、中国が21%で前年（12%）を上回り、シェアを伸ばした。続いて、ベトナム、タイ、セネガル、メキシコとなっている。

輸入価格は、814円と周年高値推移だったことを反映し、前年（601円）をかなり上回った。

近年、西アフリカ沖合での漁に左右されることも多いが国産マダコ、ミズダコ、ヤナギタコ等、国内のタコ類の供給が恒常的にみられている。本年は、輸入タコの価格高騰を受けて国内産タコ類も総じて堅調な価格推移となった。

在 庫 量

本年の平均在庫量は、1.1万トンと国内搬入の少なさもあって前年（1.4万トン）をかなり下回った。

越年在庫は1.2万トンで前年（1.6万トン）をかなり下回った。周年を通じて西アフリカ沖からの搬入減少を受けて再度低水準の越年在庫となった。

消費地入荷量と価格

26年の東京の入荷量は、0.8万トンで輸入量の減少を反映し、前年（1.1万トン）をかなり下回り、消費地での取扱いはかなり減少した。

本年の末端マーケットでは単価高を反映し、特売は極端に少なくなり、スーパーの棚に占める割合も少なく、消化も減少した。

家庭消費支出は、末端単価が上昇もあって数量、金額とも減少した。

東京の価格は、929円で前年（706円）をかなり上回り、本年もほぼ輸入価格の上昇を反映した格好となった。